

[掲載紙] 上毛新聞「点描ぐんま経済 日銀支店長 見聞録」

[掲載日] 2016年5月27日

[テーマ] 鉄道の思い出—懐かしい車両に再会—

今からちょうど1年前、前橋への転勤により見慣れた姿に再会することができて、大変うれしく思った。上毛電鉄700系車両のことである。車両はオールステンレスだが、正面は強化プラスチック製で、編成別に鮮やかな色で塗り分けられている。この「レインボーカラー」は、車両が京王井の頭線で使われていた時からのものである。私は中学1年生からの8年間、通学に井の頭線を使っていた。

鉄道ファンでもない私が、安中市松井田町横川にある碓氷峠鉄道文化むらに行きたくなったのは、その車両を見た時から。特に、食堂車をもう一度見たい、と思った。なぜか。

小学4年生の夏、私は岩手県の親戚を訪ねて初めて一人で旅をした。上野駅まで送ってくれた母親は、列車でたまたま隣となった見ず知らずの人に「花巻駅で迎えが来ますので」と私を委ねた。それほどのだかな時代であった。

在来線特急で6時間の旅。持っていた弁当は早々に食べ終えてしまい、何かあった時に使いなさいと渡されていたお金を握りしめて、一人で食堂車に移動。家で食べるのとは違う本格的なハンバーグステーキを夢中で頬張った。鉄道の高速化とともに食堂車が廃止されるというニュースを聞いた時は、大変寂しく思った。

さて、念願の横川行きが実現したのは、ゴールデンウィーク最後の日曜日。妻とのふとした会話で思い立った。当日は「安政遠足待マラソン」が開催されており、車窓からの眺めはとてにぎやか。鉄道文化むらでは、食堂車は当然のこと、多数の懐かしい車両を目にすることができた。あっという間に帰りの時間が来てしまったので、トロッコ列車とめがね橋は次の機会とし、横川—高崎間の蒸気機関車での旅を楽しんだ。

安中市は、地域が主体となって総合的な観光事業を展開する新しい観光推進体制「安中版DMO」づくりに取り組んでいる。安中市の碓氷峠鉄道施設、富岡市の富岡製糸場、軽井沢町の旧三笠ホテルといった明治期に生まれた国の重要文化財を結び付けるかたちで、新たな観光ルートを創り出す動きが加速する。この機会に、皆さんも思い出探しに出掛けてみませんか。

### 旅行のきっかけは？

友人や家族との会話	56.2%
-----------	-------

(注) インターネットアンケート調査。

対象は 1959～1970 年生まれの男女。

2013 年 11 月実施。

(出所) 株式会社 JTB 総合研究所「バブル世代のライフスタイルと旅行消費に関する調査」

〔 日本銀行前橋支店長  
    神山 一成 〕